建礼門院右京大夫と星の歌

坂田光代

はじめに

建礼門院右京大夫（以下右京大夫）は、平安末期から鎌倉時代という、歴史の大きな転換期に生きた女性である。高倉天皇の中宮建礼門院徳子に仕えた右京大夫は、源平争乱によって、没落していく平家一門、そして何より、恋人資盛の死と、激動の時代を肌で感じた女性であった。こうした体験をはじめ、忘れがたい出来事が綴られている『建礼門院右京大夫集』には、右京大夫を特徴づける次のような一節がある。

十二月ついたち頃なりしやらむ、夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲さわがしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり。引き被きふしたる衣を、更けぬるほど、丑二つばかりにやと思ふほどに引き退けて、空を見上げたれば、ことに晴れて浅葱色なるに、光ことごとしき星の大きなる、むらなく出でたる、なのめならずおもしろくて、花の紙に箔をうち散らしたるによう似たり。今宵はじめて見そめたる心ちす。さきざきも星月夜見馴れたることなれど、これはをりからにや、ことなる心ちするにつけても、ただ物のみおぼゆ。

月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれをこよひ知りぬる[1]　（二五二）

夜中に再び起き出して、見上げた空は、それまでの曇りがちのものとは違い、すっかり晴れて、光り輝く星が一面に広がる星空であった。右京大夫は、それを「花の紙に箔をうち散らしたるによう似たり」と形容し、「星の夜の深きあはれ」を歌に詠んでいるの

である。これは、大原に隠棲した建礼門院の変わり果てた姿を目の当たりにした後、比叡坂本の旅に出たときの詠であった。

この一節に注目し、右京大夫を「星夜賛美の女性歌人」として顕彰したのは、新村出氏である。氏は、「日本文学絶無の文字が味はれる」として、前掲した星を詠った箇所を紹介し、「かくの如く星夜を賛美した叙景抒情兼ね備つた文字は、国文学史上の絶唱と云つても過言ではあるまい。」とたたえている。[2] さらに、「花の紙に箔をうち散らしたるによう似たり。」という比喩をとりあげて、

世尊寺流の手にも似かよふといはれる『藍紙万葉』を私たちに想浮べさせもし、追福に書きもしたらう縹紙金泥の経巻を私たちの眼に映じさせる。私たちは信ずる、あの文句がこの一節に対して画竜点睛となつてゐると。[3]

と右京大夫を絶賛しているのである。七夕伝説、乞巧奠が中国から伝来して以来、日本の習俗とも融合しながら、多くの七夕の歌が詠まれてきたが、それ以外で星が取り上げられることは稀である。こうした和歌史において右京大夫は、星を詠んだ数少ない歌人として注目され、彼女を語る際、この星の歌はしばしば取り上げられるのである。

右京大夫の星の歌の独自性・価値を通史的にたどりつつ、比較しながら明らかにしていこうとするのが本論のねらいである。右京大夫以前――『万葉集』の時代から、右京大夫周辺――鎌倉時代までを目処に、七夕以外の星の歌を調べ、検討していきたい。

一

まずは、右京大夫以前、奈良・平安時代に遡ってみよう。[4]

奈良時代――『万葉集』においても、七夕の歌は百数十首あるが、それ以外の星の歌は、わずかである。例えば、次の歌は、天武天皇が崩御した時の、皇后持統天皇の詠である。

北山にたなびく雲の青雲の星離れ行き月を離れて

（巻二・一六一）

天皇が皇后や皇子を残し亡くなってしまったことを、雲が星や月を離れていく様子で表している。伊藤博氏によると、「青雲」は天武天皇、「月」は皇后、そして「星」は皇子たちを譬えているという。[5] 用いられている詞、表現に注目すれば、この歌は、中国的色彩の濃い歌である。「青雲」は、漢籍から借りた語であるとか、[6] 中国で霊雲であることが多く、別世界に神上がった天武を畏敬する心があるか[7]というような指摘がある。また、「星離」の語は、『文選』江賦に見られ、それとの関係も指摘されている。[8] 中西進氏も、この歌における陰陽の思想、中国的表現の要素を認めている。[9]

次の歌も、中国的表現の歌である。

天を詠む

天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ隠る見ゆ

（巻七・一〇七二）

この歌は、群がる星を林に見立て、月が星々の中に入っていく様が詠われている。「星の林」という語は、『角川古語大辞典』に、「多くの星の群がりを林に見立てていう語。『林』は、『林、聚也（広雅・釈詁）』とあるように、漢文で多数のものの集まっているさまをいう。[10]」とあるように、漢文的表現である。月を舟に譬えた「月の舟」は、『懐風藻』文武天皇の漢詩に見られ、発想が似通ることも指摘されている。[11]

小島憲之氏は、『万葉集』のことを述べた箇所で、「詠物歌即ち巻七の『詠天』『詠月』など『詠何の歌』は、懐風藻の『詠何』の詩に照らして、漢籍の方法による机上の歌である。[12]」と述べ、一〇七二番歌が、漢文にならった表現であることを指摘している。氏の指摘で明らかなように、この歌は、中国文学に影響を受けており、発想や表現に和歌における独自の星の美を見出すことはできないのである。

以上に挙げた、中国的表現と思われる二首のほかに、金星が詠まれている。それは、「夕星（ゆふつづ）」――宵の明星、「明星（あかほし）」――明けの明星という語で見える。

飛ぶ鳥の　明日香の川の（中略）通はす君が　夏草の　思ひしなえて　夕星の　か行きかく行き　大船の　たゆたふ見れば　慰もる　心もあらず（以下略）

（巻二・一九六）

世の人の　尊び願ふ　七種の　宝も我は　なにせむに　我が中の　生まれ出でたる　白玉の　我が子古日は　明星の　明くる朝は　しきたへの　床の辺去らず　立てれども　居れども　共に戯れ　夕星の　夕になれば　いざ寝よと　手を携はり（以下略）

（巻五・九〇九）

一九六番歌「夕星の」は、「か行きかく行き」、九〇九番歌「明星の」は、「明くる朝」、「夕星の」は、「夕」のそれぞれ枕詞として用いられている。一九六番歌については、『角川古語大辞典』に、「金星が周期の半分は宵の明星として西の空に現れ、半分は明けの明星として東の空に現れることからいう。[13]」とあるように、金星出現の特性からきた表現と思われるが、九〇九番歌の表現も同様に、夕方と明け方に明るく輝く、金星の特性によるものだろう。

そのほか、七夕の歌の例ではあるが、金星が詠まれた次のような歌がある。

夕星も通ふ天道を何時までか仰ぎて待たむ月人をとこ

（巻十・二〇一四）

以上が、『万葉集』における星を詠んだ歌である。最後に挙げた

七夕の歌を含め五首とわずかであり、数の上からも星への関心の低さが窺える。内容からしても、星の美に感動したというのではなく、むしろ、星自体を対象にしたものではないと言えるだろう。

では、平安時代になるとどうだろうか。

平安時代の歌集には、菊・火・蛍などに星を見立てる歌が見られるようになる。こうした見立ての歌は、平安時代の星を詠んだ歌の中でも多くを占め、主軸となっている。次に挙げたのがその例である。

晴るる夜の星か河辺の蛍かもわが住むかたの海人の焚く火か

（伊勢物語・一六〇）

大空にあらぬものから川上に星とぞ見ゆる篝火の影

（貫之集・一五六・鵜川）

久方の雲のうへにて見る菊は天つ星とぞあやまたれける

（古今和歌集・秋歌下・二六九・藤原敏行）

五月闇雲間の星と見えつるは鹿尋ね入る照射なりけり

（堀河百首・四三〇・肥後）

『堀河百首』肥後の歌の「照射」は、鹿を射る狩のことだが、鹿を誘い出し、また反射する目を目標とするために松明や篝火を用いる。

『古今和歌集』藤原敏行のような、菊をめぐる歌は見立ての代表的なものである。そして、こうした菊を星と見立てる発想は、漢詩による。小島憲之氏は敏行の歌に注目し、菊の花を星に、葉を雲に見立てた表現は、中国・日本の漢詩に先例があることを指摘している。氏は、滋野善永の雑言「九日翫二菊花一應製」（經国集十三）が「類書」によって様々な故事を詠み込んでいることを述べているが、そのうち「葉如レ雲、花似レ星」は、普盧諶菊花賦「翠華雲布、黄蘂星羅」（藝文類聚・初學記菊）によるとしている。それを示した上で、先の敏行の歌を挙げ、「『黄蘂星羅』を下にふんだものと見るべきである」[14]と述べている。そして、その著書の結びにおいて、和歌に現れた種々の漢籍の利用の結果として、再び菊の花の例を挙げ、星に見立てた表現について言及している。「即ち『星羅』『花似レ星』の詩句はこれらの中國の詩賦による表現である――直接には「類書」の「菊」の條による――。このやうな中國詩の表現が平安初頭詩の表現に採用されて、常識化され、やがて古今集の『菊を星と見る』といふ表現へ何のためらひもなく採用されるやうになつたものと云へる[15]」と述べ、中國詩から平安初頭詩、歌の表現への同様の例として、『新撰万葉集』の

大空を取りかへすとも聞かなくに星かと見ゆる秋の菊かな[16]

という歌も挙げている。火や蛍については、確かなことは言えないが、「『火』を『星』に見立てる表現は、既に漢詩に見える。」（和

歌文学大系20[17]とあるように、火と星についても、漢詩の影響を示唆する指摘もある。そもそも見立てという表現自体が、漢詩文に由来した[18]ということを考えると、中国文学の影響もあるのだろうか。

そのほかには、数の多さという星の一面から、多さや程度の甚だしさを表すこともある。また、「星をいただく」という詞つづきや、公卿・殿上人を「星の位」や星と表現することもある。「星をいただく」というのは、朝、星の見えるうちから仕事に出て、夜、星の見える頃帰るということから、勤務に励むことをいう。

あひ見まくほしは数なくありながら人につきなみまどひこそすれ　（古今和歌集・秋・一〇二九・紀有朋）

年をへて星をいたゞく黒髪のひとよりしもになりにけるかな　（詞花和歌集・三七四・大中臣能宣）

では、景色としての星は、どう詠まれているのだろうか。

『万葉集』にも見られた金星は、

日暮るれば山の端出づる夕づゝの星とは見れどはるけなきやぞ　（忠岑集・六二）

の例をはじめとして数例あり、火に見立てられるなど、比較的親しまれていたことが窺える。そして、

めづらしな朝倉山の雲ゐよりしたひ出でたる明星のかげ　（山家集・一五二三）

のように、神楽歌「明星」にちなんで詠まれることもある。神楽歌は、神楽の式次第にそって組織的に配列されており、それぞれの歌謡が歌われる時間帯・順序はたいてい整然と定められている。そのうち、「明星」は、神楽歌全体の構成を三種に大別した際の、三番目にあたる。夜を徹しての神楽が終盤をむかえ、朝になるころ詠われるのが、「星」の歌である。[19]夜明けを告げる明けの明星が出る頃「明星」が詠まれたのである。

また、金星に限らず、夜空の星が詠まれた歌が数例認められたが、それらは、月と共に詠まれたものである。

ひさかたのそらなるほしにたぐはずはひるとぞ見ましあきのよの月　（江帥集・一〇〇）

この例が示すように、星が詠われているといっても、月の明るさを詠った歌の中であり、主題は「月」にある。夜空の景物として多く詠まれ、よく引き合いにだされる月と比べると、星の存在は小さく、月の影に隠れてしまっているのである。

こうした平安時代の歌の中で、次の二首は注目される。

我ひとりかまくら山をこえゆけばほし月夜こそうれしかりけれ　（永久百首・五〇四・常陸）

天つ星道も宿も有ながら空に浮きてもおもほゆる哉

（拾遺和歌集・雑・四七九・菅原道真・「流され侍ける道にて詠み侍ける」）

『永久百首』常陸の歌にある「星月夜」は、『角川古語大辞典』によると、「星が輝き、月がなくても月夜のように明るいと感じられる夜。また、その星の光。」[20]とあり、星に注目した詞である。見た限り、「星月夜」という詞が見られるのは、常陸の歌が初めてであり、平安時代では、この一首ぐらいである。月のように明るい星空を表し、星の光に注目し、それが主題となったこの「星月夜」という詞の登場は、和歌史の中でも意義のあることであろう。さらに、常陸は、そうした星空への感嘆を素直に表している。右京大夫以前、奈良・平安時代通しても、星空の美しさに注目したのは、この歌だけである。

『拾遺和歌集』の菅原道真と伝承される歌は、星空を賛美したというものではないが、空にある星を「浮きて」と表現し、左遷される道中の不安定で落ち着かない心情が重ね合わされている。星に注目し、心情の吐露の対象として詠まれているこの歌も、これまで見てきた平安時代の星の歌とは、区別されるであろう。

以上、平安時代の星の歌をたどってみた。このほか、挙げた例の中にもあるのだが、「星」に「欲し」や「まくほし」など、掛詞として用いるのも平安時代の特徴である。こうしてみると、平安時代は、見立てや掛詞など、和歌的修辞のなかで、慣習的な詠み方をする例が大半である。親しまれたと思われる金星、最後に挙げた二首のほかは、星は主体として扱われることがほとんどなく、月の影になってしまっている。星に注目した歌が少ないということは、奈良時代を通しても同様であり、右京大夫以前の特徴として言えるだろう。

二

次に、中世初期、鎌倉時代を見てみたい。鎌倉時代においても、平安時代同様の傾向が見られるが、ここでは、平安時代には見られず鎌倉時代の特徴をなす歌について述べていきたいと思う。それは、星に対する信仰心から詠まれた歌と、京極派を中心に星に注目した叙景歌の二点である。

信仰される星の代表格は、北極星・北斗七星である。北極星（北辰）に灯をささげる「御燈」[21]、北斗七星（七つの星）については、「四方拝」など、平安時代から朝廷の行事であった。生まれ年の干支に従って、北斗七星のいずれかに属し、その人の運命をつかさどる星を「属星」というが、「四方拝」は、元朝寅の刻に、天皇がその年の「属星」を唱え拝し、天地四方を拝して天下の泰平を祈る儀式である。金指正三氏によると、「属星」自体は、上は天子から

下は庶民に至るまで崇拝され、[22]広く浸透したらしい。以下、「属星」に祈る信仰がうかがわれる歌を、氏の指摘する例の中から挙げると、

いのりこふ星の宿も雲晴れていく代も契る住吉の里　（家隆）

北のほしやあづまの旅に出る人をいのる光は空に見ゆらん　（慈円）

などがある。[23]星を崇拝し、供養するような星占い・星祭りは、天文道・陰陽道・道教・密教などから成り立ち、これら古代中国で発達した思想・信仰は、互いに習合し、あらゆる思想を含んだかたちで、日本に伝来してきた。なかでも特に、密教との習合は濃く、星祭りは盛んだった。空海、また円仁・円珍によってもたらされたとする宿曜経をもとに、運勢を占ったり、日月食の予報などをする「宿曜師」の歌に次のようなものがある。

夜更けて北斗拝し侍けるに、月を見て

天つ空星の宿りを仰ぐ夜はかならず待たぬ月も見えけり

（万代和歌集・二九九三・法印良算）

このほか、釈教歌も数首認められた。

はるゝ夜の雲井のほしの数〳〵にきよき光をならべてぞみる

（玉葉和歌集・釈教歌・二六七八・源親長・無量寿経、「厳浄国土皆悉覩見」）

さまざまな思想が影響しあい、日本に伝来した星への信仰であるが、星が地上の運命を司り、個人のみならず、天下や国家、君主の運命・吉凶を表すという信仰によるのか、天皇の治世と星が併せて詠まれるようになる。星の光の静かで穏やかな様子で、よく治まる御代を祝の気持ちをこめて詠っており、その穏やかな光が、天下泰平の象徴となっているのである。

すべらぎのあまねき御代を空に見て星のやどりの影もうごかず　（拾遺愚草・七〇三）

かげなびくほしのくらゐものどかにてそらにぞしるき御代のけしきは　（千五百番歌合・二一八九・家隆朝臣）

ここに示した例にある「星の宿り」「星の位」は、星座の意味の他に公卿をさすことは先述したが、宮中に列し、天皇を補佐する地位を星座にたとえるのは、おそらくは中国の北辰信仰などが関係しているのだろう。

以上に挙げた例以外にも、星に対して「祈る」や、星が「いさむ」という詞が見られたり、星を「たのむ」「頼もしき」というように、星の信仰が窺われる歌が割合的にも多くあった。さらに、星に精神性を見出した『拾玉集』の歌を次に紹介し、星の信仰の結びとしたい。

月もほしもさやかにてらすかひぞなきこのよの人のうはの空

ごと　（二三七三）

思ふとてこころの水にうつるらし空にしらするほしの光は

（三八八三）

鎌倉時代のもう一つの大きな特徴として、叙景歌の中に星が詠まれるようになったことが挙げられる。平安時代において、月と共に詠まれても、影の薄かった星であるが、冬の景色の中にその冴えわたる光が詠まれるなど、明らかに注目を浴びる傾向を見せている。また、露と共に詠まれるなど、新たな美が見出されている。

あけわたるくもまのほしのひかりまでやまのはさむし峯のしらゆき　（新勅撰和歌集・冬歌・四二四・家隆）

冬の木の霜もたまらず吹くかぜに星の光ぞまさりがほなる

（拾遺愚草員外・五一八）

はるるよのほしのひかりにたぐひきておなじそらよりおけるしらつゆ　（秋篠月清集・二〇五）

冬の星は、雪や霜といった冬の景物・風と共に、冷え冷えとした景色の中に詠まれている。冬の厳しい寒さこそ、星の光は冴えわたり、その美しさが最も輝く時であろう。星の輝きは冬の寒さを演出しているのである。また鎌倉時代に入り、叙景歌としての星の歌は、京極派に顕著ではあるが、ここに挙げた例の中にもあるように、前代歌人、新古今時代にも星が詠まれていたことが窺える。

それでは、京極派と星の歌はどうだろうか。

京極派に顕著と述べたが、星の歌の半数以上を占めるのが、伏見院、永福門院、光厳院といった京極派を代表する歌人である。京極派歌人や彼らの歌風の反映された『玉葉集』『風雅集』と『右京大夫集』の間には、服部喜美子氏を始めとして、影響や関係性が指摘されている。[24] また、岩佐美代子氏は、星の歌についても言及している。岩佐氏は、『玉葉集』に入集した右京大夫の星の歌については、「為兼は必ずやここに意義を認めてこの歌を採ったであろう。これによって京極派歌人は星の美に目覚めた。」と述べるなど、[25] 撰者為兼が右京大夫の星の歌の価値を認め、彼女の星の歌の影響によって京極派歌人が多くの星の歌を作ったことを指摘している。そして、その例として、

むらくに雲のわかるゝたえまより暁しるきほしいでにけり

（玉葉集・雑歌二・二一三八・従三位為子・「三十首歌めされし時、暁雲を」）

月やいづる星のひかりのかはるかな涼しき風の夕やみの空

見るまゝにあまぎる星ぞうきしづむ暁やみの村雲の空

（風雅集・雑・一六二四）

などの三首が影響歌として挙げられているのである。[26]

それでは、そのほかの京極派による星の歌を挙げてみよう。

ほしのかげもそなたはうすきしのゝめに山のは見えて雲ぞわかるゝ　（玉葉集・雑歌二・二一三九・従二位兼行）

くらきよの山まつかぜはさわげども梢の空に星ぞのどけき　（玉葉集・雑歌二・二一六〇・永福門院・夜の心を）

月も入り鐘も声やむ明けぐれの空しづかなる星の影哉　（永福門院百番自歌合・一六七）

かげよわみありあけの月はいでぬれど猶ひかりあるほしのかずかず　（伏見院御集・九八三・秋星）

ほしのかげはあらぬかたよりかずそひぬ入日のあとのそらをのこして　（伏見院御集・一二〇一）

いかにぞやほしのひかりもつねならず月はまだしき夏のゆふやみ　（伏見院御集・一三九七・夏星）

はれくもりほしのひかりぞさだまらぬうきてただよふむらくもの空　（俊光集・五三九）

雲の色星のひかりも同じ空の長閑になるやあかつきになる　（花園院御集・一三六）

これらの例からも分かるように、京極派の星の歌は、その数のみならず、星のとらえ方、表現方法の点でも注目されるのである。薄明の美はとりわけ京極派の好んだ瞬間であり、暁の情景の星もいくつか目に付くが、暁にかかわらず、夕暮れの星、雲間を動く星、星の光、情景の変化に注目した詠われ方を見てくると、光線や明暗の感覚を好み、色彩感覚鮮やかで、時間の推移をとらえ、対象を動的に把握するという京極派の叙景歌の特色によくあてはまるものである。その意味で、星は京極派の特色をよく表す題材であるのだろう。あるいは、星という題材をそういう視点でとらえるのが京極派であると言うべきだろうか。

そして京極派のもう一つの大きな特徴が、彼らの星の歌にも言える。それは、京極派の星の歌が、心情表現を伴わず、写実的に描写されているということである。この点は、右京大夫と違う点であろう。また、このことは、『玉葉集』当代歌人の「叙景と抒情を分離しようとする傾向」[27]や、自然観照において、「主観的な表現をほとんど使わず、修辞を排し抒情をふり捨てて、写実・感覚に根ざした新しい美的世界を描出しようと志向」[28]する『風雅集』の特徴とも重なる。これに対し、糸賀きみ江氏が、「対象の自然に焦点を合わせているが、その描写だけに終止していない。自身の心情を対象と比較し、あるいは対象と交錯させつつ歌うのが、作者の様式のひとつである。」[29]と述べているように、「自然」と自らの心情を重ね合わせ、その心情と共に歌に表出するのが右京大夫である。

そして、傷心の中ふと見出した圧倒的な星空に対しても、その感動を「深きあはれ」ということばで率直に詠んだのであった。

既に指摘されているように、京極派と右京大夫の間には、少なからぬ影響が考えられ、右京大夫の星の歌と、京極派の数多くの星の歌を入集せしめたこととは、全く無関係ではないだろう。しかし、自然の情景をとらえ、それを写実的に表すのが京極派の歌である。彼らの心がとらえたのは、星についても例外ではなかった。京極派歌人によって詠まれた星の歌は、京極派好みの、京極派らしい歌であって、右京大夫とは異なった京極派独自の視点で星が詠われている。

以上、鎌倉時代については、星の信仰に関る歌と、その数も多く、右京大夫との関係も指摘される京極派を中心とした叙景歌の二点について述べてきた。こうした和歌に現れる星は、信仰によって見いだされ、また、鎌倉時代も終わりを迎える頃現れた革新的グループ、京極派によって、独自の視点でその美しさがとらえられていた。こうした二点の特徴以外には、平安時代に触れたような歌のほか、定家の歌に、宵の別れや、暁方の漕ぎ出だした舟の様子を表す「星のまぎれ」という詞が見られたり、その他、漢詩を踏まえたものや句題和歌など、漢詩の影響が考えられる星の歌もあったことを付け加えておきたい。

三

以上、奈良時代から鎌倉時代――右京大夫以前から前後する時代に至るまでの星の歌を概観してきた。右京大夫は、平安末期から鎌倉時代にかけて生きた歌人であり、『建礼門院右京大夫集』は、折に触れた詠歌がまとめられ、鎌倉時代初頭に成立したとみられる歌集である。

これまで見てきたように、漢詩文・大陸から伝来してきた信仰など、中国や外来の文化の影響を大きく受けつつ、数は少ないながらも、各時代において星は様々な詠まれ方をしていた。しかし、右京大夫のように星空の美しさに対する感動を率直に詠ったものはなかなか見当たらない。歌集の性格や詞書の長さなどが特徴とされている『建礼門院右京大夫集』であるが、星空への描写とその思いを述べた詞書も同様、例を見ないものである。それは、右京大夫と同様に夜空の星に注目した京極派の歌や、右京大夫と時代の重なる新古今時代の歌人の歌と比較した際に、その特殊性がより浮き彫りにされるであろう。

また、右京大夫自身にとって、この星の歌はどうなのだろうか。彼女の人生と、その人生の記録となっている歌集の性格、歌が生れた状況を合せて考えてみれば、右京大夫にとっても星の歌は大

きな意味があるだろう。身近な人々が次々と没落していく動乱の中、資盛を失い、栄華を極めたかつての主人、建礼門院の変り果てた姿を見舞った後に、右京大夫はこの星空に出会った。悲しみと絶望の中で見出した星月夜に対し、「なのめならずおもしろくて、」「今宵初めて見そめたる心ちす。」と詞書で述べて、「星の夜の深きあはれをこよひ知りぬる」と詠ったことばからは、右京大夫をとりまく状況と悲しみを一瞬救う星空の存在を認めることができるだろう。あるいは、そういう状況にあったからこそ、星空に対する美しさと驚きがより鮮明になりえたのかもしれない。

また、序文で、「我が目ひとつに見むとて書きおくなり。」と述べ、跋文でも「我が目ひとつに見むとて書きつけたるを、」と主張しているように、『建礼門院右京大夫集』は、芸術性に重きをおいたものではなく、自らの真実をありのままに詠った歌集であることが示されている。それはまた、自分の人生を再確認する、彼女の人生の記録でもある。このような歌集に残された星の歌は、そして彼女の記憶に残るあの日の星空は、背後に愛する人や縁ある人を失い、没落させた悲しみの体験を抱えながら、彼女の中で輝いていたことだろう。

また、本稿で言う右京大夫の星の歌は、「月をこそ」の一首を指すが、『右京大夫集』には「年々、七夕に歌をよみてまゐらせしを、」と始まる五十一首からなる七夕歌群が残されている。詠出年次は不明なものの、内容を見ていくと、嘆きや悲しみ、同情を求めるなど、資盛との恋、別れによる彼女の心情の変化を窺うことができる。七夕の歌においても、当時主流である秋の客観的季節感とは異なった「心情の流露」[30]という、右京大夫の独自の面があるようである。今回は、七夕の歌は対象としなかったため、検討することはなかったが、右京大夫が七夕の歌を詠み、歌集に多く残したことを最後に触れておく。

以上のようなことも含め、本稿のまとめに入りたい。右京大夫以前から周辺に至る星の歌を検討した結果言えることは、右京大夫ほど星を題材として、抒情を直接的に表した歌は、やはりないということである。彼女は、星への感動を「深きあはれ」と表し、星空の美しさの発見、それに対する驚きと感嘆を率直に詠った。右京大夫以前、奈良・平安時代の中では、星の美をとらえた歌自体、ほとんどないと言ってもいいだろう。そして、鎌倉時代になって徐々に見られ、右京大夫の影響もあって、京極派に見られるようになったが、その京極派を含めても、右京大夫の表現が特異であるのは明らかだろう。このように、星空への感動と驚きをありのままに詠じたこと、そこにこそ右京大夫の独自性と価値が認めら

れるのではないだろうか。そして、それは、歌集を貫く右京大夫の人生・生き方を反映したものと思われるのである。

注

(1) 糸賀きみ江校注『新潮日本古典集成　健礼門院右京大夫集』昭和五四年七月、新潮社。以下『建礼門院右京大夫集』の引用は、同書による。歌番号は、『新編国歌大観』のものに統一した。

(2) 新村出『南蛮更紗』平成七年十二月、平凡社（東洋文庫五九六）、二五六―二五七頁。

(3) 新村、前掲書、二五九頁。

(4) 和歌の検索には、『新編国歌大観』の CD-ROM を用い、「ほし」「星」の語で検索した。その際、今回は七夕の歌は対象としないので、「星合」や「彦星」などの語で、七夕にまつわる歌は考察の対象とはしなかった。また、金星が、「夕つづ」「夕づつ」などの表記で検索に表れない語もあるが、それらは、管見の及ぶ範囲で考察の対象とした。時代区分も、この CD-ROM によった。

(5) 伊藤博『萬葉集釋注一』平成七年十一月、集英社、三七八頁参考。

(6) 小島憲之他校注・訳『萬葉集①　新編日本古典文学全集6』平成六年五月、小学館、一一五頁注より。

(7) 伊藤、『萬葉集釋注一』、前掲書、三七九―三八〇頁参考。

(8) 『萬葉集①　新編日本古典文学全集6』、前掲書、一一五頁注より。

(9) 中西進校注『万葉集　全訳注原文付（一）』昭和五十三年八月、講談社（講談社文庫）、一二八頁脚注参考。

(10) 『角川古語大辞典』（第五巻）、三一一頁。

(11) 伊藤博『萬葉集釋注四』平成八年八月、集英社、三三―三四頁。文武天皇の漢詩には「月舟は霧の渚に移り、楓樹は霞の浜に泛ぶ。」とあり、他、『新撰万葉集』（下）の詩「滝河浪ヲ起シテ月舟ヲ穿ツ」という箇所が指摘されている。

(12) 小島憲之『上代日本文學と中國文學　下―出典論を中心とする比較文學的考察―』昭和四十年三月、塙書房、一五四一頁。旧字を改めた。以下、ここからの引用は、旧字を改めた箇所がある。

(13) 『角川古語大辞典』（第五巻）、八〇四―八〇五頁。

(14) 小島、前掲書（注12）、一五五〇頁。

(15) 小島、前掲書（注12）、一八二七頁。

(16) 小島、前掲書（注12）による。

(17) 武田早苗・佐藤雅代・中周子　『和歌文学大系20　加茂保憲女集・赤染衛門集・清少納言集・紫式部集・藤三位集』　平成十二年三月、明治書院、二五〇頁、補注。

(18) 小林幸夫他編著　『〔うた〕をよむ―三十一字の詩学―』　平成九年十一月、三省堂、三六頁、注参考。

(19) 神楽歌については、西沢正史編『古典文学を読むための用語辞典』（平成十四年五月、東京堂出版）、三九―四〇頁、土橋寛・小西甚一校注『古代歌謡集　日本古典文学大系3』（昭和三十二年七月、岩波書店、二六二頁）参考。小西甚一氏は、「解説　一神楽歌」（日本古典文学大系3）において、神楽歌全体の構成についてまとめている。

(20) 『角川古語大辞典』（第五巻）、三一一頁。

(21) 金指正三『星占い・星祭り』昭和四十九年九月、青蛙房、二九頁。後に、北辰と北斗（北斗七星）の混同がおこってくるとされるが、『日本星名辞典』（野尻抱影、昭和四十八年十一月、東京堂出版、四頁）では、三月三日に、天皇が北山の霊厳寺で北斗七星に法燈を献ずる行事を「御燈」としている。

(22) 金指、前掲書、三五頁参考。以下に挙げる、氏が指摘した和歌は、三五頁―三六頁。

(23) これら二首について、『新編国歌大観』においては、家隆の歌は「壬二集」一九八一番・四句「幾世も君が」として、慈円の歌は「拾玉集」五六二九番にそれぞれ見出せた。

(24) 服部喜美子「『建礼門院右京大夫集』の本質と『玉葉・風雅集』」『愛知県立女子大学・短期大学紀要』十二号、昭和三十六年十二月。そのほか右京大夫と京極派歌人、『玉葉集』『風雅集』の関係を述べた論考に、岩佐美代子『京極派歌人の研究』（昭和四十九年四月、笠間書院、フィリプ・ハリス「新古今時代における玉葉・風雅歌風の前兆―建礼門院右京大夫を中心として―」（『国際日本文学研究集会会議録』第二回、昭和五十四年二月、国文学研究資料館）、戸谷精三「玉葉集、風雅集に入集の建礼門院右京大夫集の和歌をめぐって」（『長野工業高等専門学校紀要』二十四号、平成三年十二月）などがある。

(25) 岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈　下巻　笠間注釈叢刊22』平成八年九月、笠間書院、二〇八頁補説。そのほか『あめつちの心　伏見院御歌評釈』（岩佐美代子　昭和五十四年九月　笠間書院　一五四―一五五頁）においても、右京大夫の星の歌に触れて、「（右京大夫が）『星夜賛美の女性歌人』とたたえらえた事は今日では余りにも有名になっていますが、実はこの歌を最初に秀歌と認め、玉葉集二一五一番に撰入したのはほかならぬ為兼でした。」と述べ、この歌に共感を寄せた京極派歌人達が、多くの星の歌を作ったとしている（『新編国歌大観』での歌番号は、二一五九番）。

(26) 二首目は伏見院、三種目は西園寺実兼の歌である（今回の調査により鎌倉時代の歌集の中に見つかったものとしては、二首目の伏見院の歌が『伏見院御集』一二三八番・『金玉歌合』二七番、三首目の実兼の歌が『文保百首』五九〇番・『実兼集』四番）。従三位為子の歌は、「右京大夫の有名な星の歌（二一五九）の詞書に触発されての詠であろうが、」（『玉葉和歌集全注釈　下巻　笠間注釈叢刊22』前掲書、一九六頁、補注。二一五九は、『玉葉集』における番号。）と述べられ、伏見院の歌は、『あめつちの心　伏見院御歌評釈』（注25参照）で、為子の例を加え、右京大夫の星の歌に共感を寄せ作られた京極派歌人達の星の歌の例とされている。西園寺実兼の歌については、『京極派歌人の研究』（岩佐、前掲書、一五二―一五三頁）の中で「建礼門院右京大夫集の有名な星夜賛美の歌の詞書に材を得たものと思われ、」と右京大夫の星の歌の影響が触れられている（歌番号は『新編国歌大観』のものに改めてある）。

(27) 『日本古典文学大辞典』（第二巻）、二一三頁。

(28) 『日本古典文学大辞典』（第五巻）、二一五頁。

(29) 糸賀きみ江校注、前掲書、一二九頁注より。

(30) 糸賀きみ江校注、前掲書、一九九頁。

テキスト

＊基本的には『新編国歌大観』（CD―ROM含む）によったが、以下に挙げるものも用いた。なお、歌番号は、『新編国歌大観』のものに統一した。

・糸賀きみ江校注『新潮日本古典集成　建礼門院右京大夫集』昭和五十四年七月、新潮社

・後藤重郎校注『新潮日本古典集成　山家集』昭和五十七年四月、新潮社

・川村晃生・柏木由夫・工藤重矩校注『金葉和歌集　詞歌和歌集　新日

本古典文学大系9』平成元年九月、岩波書店
・小町谷照彦校注『拾遺和歌集　新日本古典文学大系7』平成二年一月、岩波書店
・樋口芳麻呂校注『中世和歌集　鎌倉篇　新日本古典文学大系46』平成三年九月、岩波書店
・小島憲之他校注・訳『萬葉集①　新編日本古典文学全集6』平成六年五月、小学館
・小沢正夫・松田成穂校注『古今和歌集　新編日本古典文学全集11』平成六年十一月、小学館
・小島憲之他校注・訳『萬葉集②　新編日本古典文学全集7』平成七年四月、小学館
・小島憲之他校注・訳『萬葉集③　新編日本古典文学全集8』平成七年十二月、小学館
・岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈　下巻　笠間注釈叢刊22』平成八年九月、笠間書院
・田中喜美春・田中恭子『貫之全釈　私家集全釈叢書20』平成九年一月、風間書房
・田中喜美春他『和歌文学大系19　貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集』平成九年十二月、明治書院
・神作光一・長谷川哲夫『新勅撰和歌集全釈二』平成十年三月、風間書房
・安田徳子『和歌文学大系14　万代和歌集（下）』平成十二年十月、明治書院

（二〇〇四年　卒業）